

は、宗室氏が海外講演に出られる時には必ずジョンを通訳として連れて行かれることからも窺える。

また最近彼は、千宗室氏の茶事の本(『茶室の茶事』)や随筆(これは英文毎日で『Guest on Teacups』という題で連載された)の翻訳を手がけた。この随筆の翻訳は単行本となって近く出版される予定である。

カナタとの関連でもう一つ特記しておくべきことがある。それは、一九七八年、ジョンはトロント大学夏期講座の講師を

## トリー・グラス

# 陶器づくりで生きる人の毎日

務めていることである。その講座は日本語の集中コースであったが、その中で彼は、カナタの学生達にお茶のお点前を披露し、茶道の精神について語る機会を得た。持ち合わせの茶道具は十分なものとはいえなかったが、一枚のコザを教室の一隅に敷いて、自らの手と心で茶湯をカヌタの若者達に紹介したのである。

いま、ジョン・パギトは平均的日本人よりも以上に「和敬清寂」の精神を理解する日本的心の持ち主だと言えるのかも知れない。(夙川学院短期大学助教授)

日本の焼き物の美しさに魅せられたカナタ女性が、兵庫県芦屋市の滴翠美術館の滴翠で陶器づくりの勉強に励んでいる。

「将来、できればカナタの人たちに日本の伝統芸術を紹介したい」と毎日、陶器づくりに、どろんこになりながら汗を流しているこの人は、同美術館付属陶芸専攻科(二年制)生のトリー・グラスさん。

グラスさんは一九六一年八月十一日、カナタのトロント市に生まれた。米カリフォルニア州のバークレー大学で東洋の哲学や歴史を学んだ頃から、日本の宗教、座禪、陶芸、書道などに人一倍、興味を

たという。昭和五十四年九月、夢が実現、グラスさんは大阪府交野市の会社員塩口正さん方にやっってきた。奥さんの知子さんが英語の先生で、日本語をどしどし教え、講師陣にも大学の美術担当の教授をはじめ京都の伝統工芸作家岩瀬重哉さんを据え、集めている。このため、陶芸家を志す若い人やお年寄りがつぎつぎ入学している。外国人の専攻生もかなりあり、すでに十余人が巣立っている。

グラスさんは毎日、午前十時から午後八時ごろまで、専攻科の教室で粘土をこね、創作活動に励んでいる。何回やっても、気に入った作品ができず、一度、形のでき上がったものをつぶして、初めからやり直す、という苦勞の連続だが、うまく作れたときの喜びは大きい。最近は原爆の広島に思いをはせて花瓶を仕上げた。「もった、もった日本のこと、陶で修業もした。

このグラスさんの陶器づくりにかける情熱に動かされた京都の工芸家や知人らが、滴翠美術館の陶芸専攻科へ入学することをすすめ、グラスさんは、今春から専攻科生になったのである。

年六月に設立され、日本の滴翠美術館は昭和三十九年正月の遊び道具の「かるた」「羽子板」や京焼き、紀州焼きなどの「陶器・茶器」、飾りものの「人形」などの美術品を公開展示するほか、陶芸と芸術の二つの研究所を併設している。そのうち、陶芸研究所の専攻科は、美術館創立十周年を記念して四十九年に発足したもので、顧問には有名な陶芸家加藤啓九郎さんや

持つようになる。

父親の建築設計業ミル・グラスさんが、趣味で東洋の古美術品のコレクションをしており、日本の陶芸品を見る機会が多かったのだ、グラスさんが五人兄妹の末っ子で、長兄と次兄が音楽家、三番目の兄は古美術収集家、姉も美術品を鑑賞するのが好きという「芸術愛好一家」に育つたために、自然と陶芸の世界へ目が向くようになった。

ようになった。

グラスさんは大学で勉強をするうちに、日本へ行つて勉強してみたいという希望がますます強くなる。そこで、まず日本語の勉強に努力した。この頃は「寝てもさめても、日本語、日本語」の毎日だった

## 福田 純治

元京都市立芸術大学名誉教授の近藤悠三さんといた有名人を揃え、主任教授には京都の伝統工芸作家岩瀬重哉さんを据え、講師陣にも大学の美術担当の教授を集めている。このため、陶芸家を志す若い人やお年寄りがつぎつぎ入学している。外国人の専攻生もかなりあり、すでに十余人が巣立っている。

グラスさんは毎日、午前十時から午後八時ごろまで、専攻科の教室で粘土をこね、創作活動に励んでいる。何回やっても、気に入った作品ができず、一度、形のでき上がったものをつぶして、初めからやり直す、という苦勞の連続だが、うまく作れたときの喜びは大きい。最近は原爆の広島に思いをはせて花瓶を仕上げた。「もった、もった日本のこと、陶

このグラスさんの陶器づくりにかける情熱に動かされた京都の工芸家や知人らが、滴翠美術館の陶芸専攻科へ入学することをすすめ、グラスさんは、今春から専攻科生になったのである。

年六月に設立され、日本の滴翠美術館は昭和三十九年正月の遊び道具の「かるた」「羽子板」や京焼き、紀州焼きなどの「陶器・茶器」、飾りものの「人形」などの美術品を公開展示するほか、陶芸と芸術の二つの研究所を併設している。そのうち、陶芸研究所の専攻科は、美術館創立十周年を記念して四十九年に発足したもので、顧問には有名な陶芸家加藤啓九郎さんや

芸のことなどを知りたい。わからないことが多いため、なんでも勉強をします。わたしは小さい子が好きなので、将来、カナタへ帰って、子どもたちにものをつくる楽しさを教えたい」というのが、グラスさんの目下の夢である。

(読売新聞芦屋通信部)



陶器づくりの励むグラスさん